



近世說美少年錄

九編
五

近世說美少年錄

~ 13
3567
45



門 13
號 3567
卷 45

新編 石童子訓卷之二十

東都 曲亭主人口授編次



魚丸妖魔と對治と絶つ家と興を
晴賢命と免まそ夜之池邸小走る

却説和甲正忠大江社四郎成勝の防守筑四郎季彦杵臼入道趙心と共
侶の奈良櫻久重作次世目越松時八鶴脛奈我四郎鴨脚短平以下の残
兵四五百名と相俣して河魁寺小なる處に魚丸母子兩廂和尚共に出迎
相勞ひて多く客殿小圍坐多士率へ都て相別れて一隊毎小憩所居り或
てかひいと金漢兒と勤て或疲乏馬と洗をまもるべし況夕飯の儲置か
る膳を馳して睡不就も多し開中へ正忠成勝久重作時八奈我四郎短平
共侶客殿小居り魚丸の實母周晋比佐尼と送ふ云の口誼あり却今日
鬪戦のころ

早稲田 大學 図書館
昭 34.6.3 雙
藏 書

敵の陣中へ怪しむ少女立去りて猛風と起去りて敗軍を其の顛末
 あり折れりて防守杵臼の援兵ふよと萬死と盡て一生とせりけり
 其の産屋を共侶の
 苦しむ苦むとちやく魚丸母子兩相和尚のへさらん外に洩れり
 通能正義被二郎押繪
 せりあるるる。有斯一程小日暮夜に初更近けれも通能正義被二郎押繪
 ありのふあけのまゝ来りて正忠成勝八重作等とあつたといひ
 尙陣歿を
 うん然らるる風吹付きて身と傷まると思ふの不安と知る由り
 時八奈我四
 短平等と部と素人然とも喘る成勝推禁めて已む開る益る
 憶ふ通能の
 懐ある仙丹あり非如深瘡を負ぬとも自療の即功るるを
 又小十郎韓錦婦
 人れも押繪少女共其蓋の武勇あり敵の虜ふるべくも
 今少選俟るる必
 信ありと詞のまじりて云ふ小十郎と敵者あり時八早く洩れて
 ろる奈我四郎短平も共侶自身と起りて争く思ふ程ふ
 張栄六郎通能

和甲小十郎正義韓錦被二郎茂洋其女弟押繪等既ふし
 坐入りて正忠成勝八重作等とあつたといひ
 能ある人々の無異に歸陣を喜び祝して却今日の難戦と
 送代小説示も通能の射
 藝正美の投石茂洋押繪の胆畧武勇又勢の敵と殺脱て敵の頭人
 三三
 浅瘡深瘡を負せり満川橋の退口より敵の困と追むる
 事の爲に體音
 通能正義茂洋押繪の憶も路も迷ふ能與村あり荒社
 一平昔時願ひて在り
 あり且其頭を池水も衣も洗ふ賤婦も路次と向む
 欲あり不憶せり健
 宗の養母大刀自の少り一時疲ゆの故能與院
 辨天堂を改め黒闇を
 祭るとして枉津天女と喚做す其後深信懈怠の
 信回又大刀自健宗の敗
 軍の怖れ黒闇の枉津天女祀りと断食をぬるも深信
 祈念を凝りて彼惡
 神舊縁も惹きて健宗と祐助ととの故小彼荒社
 枉津の木像飛去鐘野

の館たか不在ありてとと彼賤婦かのあつめの格言くけせうえん正論せいろん人意いぎの表ひょうをなす者ものを論ろんと相別あひはらる時とき
 形かたちの見えまじりて然され昔年かきやう大刃おほやと自ま棄ま却かへせし件くだまの池いけ沈しづ淪みらるりとある辨はん才さい
 天あまの化現けげんをえと思おもふかるま能よ與よ院いん類るい廢えくまるり彼村かのむら衰微すいゑいをおもしゆる隨まふ
 漏しれる者もの多おほく甲一語こういちご乙一語おついちごと續つ足たりらる補おぎなひて備つとへ告つるり開ひらか中ちゆうの通能つうのうの亦また
 中ちゆうの憶おぼふり異い虜りゆう不ふある敵てきの頭人かぶとび竹木たけのき虎狼こらう二牛にぎう鬼黑おにくろ九郎くわにらう等らう兩らう三さん名な袋ふくろの
 程ほど小こ快脱くわいたつ去さて今日けふ健宗けんそうの陣中ちんちゆう在ありて我われ們らを敵てきもまくあへる亦また是こゝ在こゝ津つの幻まぼろし
 術じゆつ多おほく然しかればある彼陣頭かのちんちゆう頭あたま出でて怪あや死し少せう女によの猛まう風かぜを起おこすり在ま津つ天女あまのめの
 化現けげんを健宗けんそうと資助すけすけ一いっ此故このゆゑ小こ躬方こんがたの勇士ゆうしも惣おん敗軍ばいぐんなるもの一箇いちくわん陣ちん殲せん
 甘あまみの邪よこしま正ただ勝かちをお古語ここのことさ思おもひはれる久後くわご憑よりくひと一いっ五ご二に十じゅうの話説わがた正ただ
 忠成勝ちゆうせいせう以下いげの衆人しゆうじん側聞かたききを魚丸いそまる母子ぼし兩廂りやうしやう和尚おそう不ふ至たるり駭嘆かいたん甘あまみの者もの
 共とも拍掌ぱくしやう感悦かんえつしと時今ときいま沈離しんり小こ登のぼりと又またも鬼神きしんの出没しゆつなるりあらはる其善神そのぜんじんの

善人ぜんじんの福ふく早はや蠅へん如ごと惡神あくじんの惡人あくじんの幸さいひとるりも自然ぜんぜんの義我ぎがを怪あやむり不足ふそくらる鄙語へいごの
 棄あきらめるり神かみあれば次つぎ買かひとるり神かみのららると齊いっせい唱な唱な唱なとあるり開ひらか中ちゆうの正志せいしの沈吟しんぎんとならるり
 拍うてたまはすり如ごとく彼神女かのかみめの辨論べんろん物怪ぶつがい変化へんげと衣え附つ傳でん漆香しつかうの辟言へきげんられる實じつは是こゝ
 的論てきろん之の憶おぼふり人死ひとしての身みを葬まうるり者もの尚なほ猫兒ねこの馮ほうとあれば其死人そのしにん勃然はつぜんと身みを起おこ
 ちて走はりと禁かぎるり者もの打うち付けされ傷きずつらるり稀まれ矣や是こゝあり人其死人ひとそのしにんを見みて猫兒ねこを見み
 されば並ならびて怪あやむり怖おそむり而已のみ則すなはち是物怪このぶつがい之の甘あま物怪ぶつがいとあるり不憶ふおく起おこるりもあれば三さん人にんの
 一念いっげんにて外ぐわいより惹ひきよりて靈りゆうありて物もの不ふ潔けつて奇怪きがいをおもしゆる是こゝよりとれを思おもふり在ま津つ天女あまのめの
 木像ぼくざうの形かたち仍いたりて怪異かいぎをおもしゆるもの理ことどり悟さとるりとあるり衆しゆう比ひ皆みな感服かんぷくとあるり是こゝ然しから
 んと應おこすり當あたりて成勝せいせうの通能つうのう正義せいぎ韓錦かんきん兄妹けいがいの料りょうをあかし神かみの示現しげんとあるり口くち管くわん稱せう
 えて且かつのあるり我われ們ら然しからる幸さいもあるり峯みね張ちやう韓錦かんきんもあるり我身わがみ和わ田でん奈な良ら柳りゆう見み
 越こ松しょう鶴かく脛けい鴨あひ脚あしと共とも六む名な軍敗ぐんばいれて難なんえのとあるり敵てきの頭人かぶとび兩らう三さん名な疾はるり負おかし

のみならず免果くつものむらざりも防守杵臼雨豊の援兵より生るるも老兵遠
 慮時お愜多。躬方の雑兵東西より集めて三四百名とゆるも雨豊の軍功多死と告
 ると季彦道心の推禁め膝を找りて否とよ彼折風歇て軌敵を敷る退り已
 りの武勇あつた雨廂師父の貸のり。雲村と旗竿の梢小附。其感應心あて
 めらむらんとお成勝正告の介也々々。と心々俱雨廂和尚向いて師父の法驗掲焉
 る彼も怪風鎮りと大敵を敷る退り。只是師父の賜有がばはる太は法力を知
 るの足れりと謝ると雨廂少あま否とよ彼禁風の秘符のあ。須道のよらあまあ
 ら三干総より前比大和寺如來禪師東國の脚のち。當山の杖と駐めて辱く一
 宿あり。貧道則法回の序次とて禁風の符とを禀。あたる所以。這地の氣
 候夏秋毎風烈くと五穀と損かとあれ檀越及土人の為。貧助の做えとる。けり
 如來師父の志の切多と感得あつて其詰朝別小臨も禪師則筆と添て

禁風の秘符一枚と。のり貧道を取せぬは是も。夏秋毎風烈くと日伴の
 雲村と竿の梢小貼。之門のあま。疾風歇と鎮ると甘羅一郡のち。隣郡
 他郷に至るも。田圃小障りあると。法驗既あつた。今日防守杵臼のあ。傳
 風尚烈かり。貸て資助の做らると説れて席上向とる。感嘆する者多。
 如來禪師ののり。人の噂あえも。思ひ。新。法驗と最有とけ。皆
 共侶と稱えけり。法譚既果。雨廂在尼の膝を找り。通能正義轉錦兄妹
 うち高ひて。そのまのを祝して。這回義士等の補助も。魚丸と世ふ。死。その
 教の。通能も。相屬。其自實。年来の道心堅固と稱賛。是時
 既。更。三刻比。正忠と成勝の雨廂和尚請を道く。夜。深。は
 師父と尼。前。退。せ。る。已。當。の。尚。明。日。の。隊。配。と。を。定。む。べ。し。と。雨。廂。ち。領。り。て
 开。る。あ。る。あ。い。入。國。晋。の。退。り。あ。る。家。人。小。相。心。か。ら。軍。議。の。席。小。幾。時。も。住。居。人。魚

九の尚這里侍とて衆議を聴く後學ふるべし誘々たるを周普比在尼の心
 は義士を向ひ告別して共の奥へ退る。當下本張通能の正徳勝を諷する
 御の神々の諭言を都て衣裳の傳抄を焚くを燻ましとられし今も思ひ
 要ある言ふ似ら。高嶋本傳の仙丹の瘵と瘵一骨を継ぐ但死を起すの事ら
 幻術を修する者或は妖怪変化にも渡され立地の對治まへとられ石見の口傳の
 今幸ふ其仙丹の已も主僕俱に秘藏ま言々人小施したれ今尚當用の定り
 然れ明日の闘戦又彼狂津の黒闇天敵の陣中を顯る。這仙丹を渡被て物ふ
 交るふあふふに渡被る便するに非除水彈見をこも。彈被る故まると一箇
 の敵のあまれの他を衆兵に避れてもむいかるべし。此の理を思ひあると議され成
 勝沈吟して開も亦拙策るわわひある今郎と煩え我仙丹を撮小る硝子の

壺小藏めて狂津天女擲る壺の則亦非粉ふる。仙丹を被身小塗れん蓋小十郎
 主の投石の精妙在昔の三所礫の伯仲を百發百中衝へく。この是を馮奉るとい
 ち正義河容る色を。開る左も右ものとも。拙に己が技藝とて克くへとら
 なる。失われ敵射方め笑るものも。良策忽地画餅する。と辭を檢二郎推察
 然るにいと外なる。謙遜辭讓の時小あそよら。とて八重作の共の心を感
 成らざる時運在在の。高きの堂より水の漏る小十郎主の投石をみて
 真なる物の硝子の小壺を目今にがたの。とてか押給も然る。とて心へ白緒の宿
 あるふ。弥生の離棚の用ひる。小なる硝子の壺も幾枚はり。かとも開も亦今
 中と困とせぬ術る。多し趙法師慰めて諸君子其美へ心安る。兩廂師父の焼
 香毎に用ひる。香盒あり硝子小く撮小し。とてぬる目不憶る。野納小賜りたけ
 ば藏めて衣裏の中在る。今令坐て見せまわす。取用不足ら幸ひあらん。とて

子舎小退だて會出らぬ其香盒と見れば果と硝子也高純の一寸許上下圓く
 を握る不堪成勝是を受戴して小十郎主首足らぬとて渡與まて正義の
 受取の握り見て思ひも程と重なり是れ仙丹を籠めり擲りて好んといひ返
 其樞二郎八重作押繪もゆるた珍香の即坐おしと感嘆も當下防守李彦の正
 忠成勝も向ひていさう仙丹の經驗疑ふべしといふも是れ加ふる如來禪師の靈符と
 のぞ其玉ふ金と添ふ如く利益の莫大なりされも對陣の始より靈符を掲げり
 枉津天女傳りて頭出るるもあら機小臨渡を心と耳く計ひぬるも又正忠點頭て
 勇士大敵と戦ふ仙丹秘付の眞助との瀕本意あらぬも經驗面々あるけ
 るいさう如くせざらんか心と成勝と共魚丸を稟せし軍談聴せぬか如く明
 りいさうの聞戦ふはれ君も出陣あひて時運を試ぬかといはれて魚丸悦小堪も
 恭まき答るる我身の乳臭は少年より大義を謀る小足らぬ幸いなく諸君子の

愛顧せられて明日の聞戦ふ王将の傲と出陣せん最度野の多し順とて逆を
 討つ二戦三戦の至るまで名を遺途不知り上へ死なるとも怨み又只教は依人のと
 然も雄々あ大人い答不趙心笑はれ介介明日の已も腋子も徒ひなら短夜
 られ出陣の準備といはれぬと稟せと成勝見えて既軍談の果は明日の准
 備まで時を要するといふ正忠も亦の多し明日辰の初刻より未の尾まで辰辰とま
 日の出時候の出陣するべし衆皆あまをあらぬとて樞二郎と心と時辰を呼て
 疾退りて疾退りて躬方の士卒出陣御せし其餘の要事は如此とて奈我四短も
 疾退れといはれて三箇の小頭人あらぬ果てを退りける話説介向頭然程小鎗野伍
 六郎健宗の枉津天女の眞助ありて闘戦士分の勝とて最快く思ふあり名た
 たる敵の頭人を一箇も敵も捕らぬ反て躬方の頭人等八深瘡流焼を負ぬも
 是猶飽心地を躬方の士卒と集合で降人毎と牽せり鎗野の鎗かへる

程小任津天女幾間小飲書院小立て俟て居り健宗かごとく或衣脱捨衣改
 め養母大刀自と共信小慌忙に書院小立て三拜あり京まき天女の神恩須弥より
 高く然しもの剛然怨敵と一時小敷き走せり最愉快の造化されともは憾た敵の
 頭人大江社四郎峯張染六等あり名あり賊徒を殺しぬむ及て躬方小金巻居り
 かの美迷惑仕ぬ天女無量の神通力も只極風と起すのとき敵と殺す疎る飲
 りて明日の闘戦より尚神力と施しぬ賊徒を迷さく敷る果能與村の荒
 祠を昇更て祭奉人急々如律令と啓され任津天女も笑て健宗開りり
 りるら約莫今易闘戦の名あり敵と敷る捕はる躬方の頭人浅瘡と負り一
 力の為るあむむ信る者の落れ故に汝速くめ諸頭人汝々の士卒も一致し
 我を念ふ必也明日の闘戦より我亦妙の段と施し敵の奴們漏まき者多し
 倘又深信疎るの負りりとも我を怨之彼阿甦寺の奴們の志有像彼身を

守る神さるあむむ実小容易の敵あり明日の夙め出陣して又大掛を敵と俟べ
 折我復出頭せ腰輿を志と一言詳小宣示健宗唯々と秘首く神説
 へとこ任津天女も開り我今宵加持来瘳あり明を俟て悉皆平愈せん
 然るの苦勞ふまことかといれ健宗喜悦小堪む大刀自の始より水明の敷珠掲
 鳴く專唱名祈念して在り這時練頭を拾はる宣示尊神説宣りの
 如く明日の怨敵伏誅せ已る母子の幸のさる當郡士庶の天幸る然る時我大刀
 自小百の二百の千の千も壽命と授けぬら念ざれ健宗も亦頭首く我
 ら所願母同利益と仰まると共戴足禮拜と奉る頭と拾はる我
 つる任津天女の形貌の見えざるの當下健宗の例のさして怪はる大刀自先立
 俱の後堂退き北嶋番太守実と召る天女の示現云云宣示くと又か明日



人ヲ勝天
天定勝人
此段十頁より
下に見えり



且開ふ陣せよと苛三隈八も他へ蚤く陣徇せよ勿論士卒に至るも深信並懈
るる者必斬入るも隈下知事と詞急迫く吩咐れ牝嶋番太の言
美く外面投て退りけ有右の詰朝健宗戎衣と近習を左右に従へ女闘立出
登見小尻より掛れ程る集ふ諸隊の頭人鍼持隈八鬼刺苛三首を蛇塚真武
四郎和六牡丹五竹木虎狼平鬼黒九郎館内也刀齋の他侍品三千名雜兵合せ五
六百名馬口剛を嫌と鎗柄の長を厭を處陔も集合然れ身小疾あ
者一夜の間皆愈て奔走障りと又も開中竹木虎狼二昨日和里夜の投石左の
眼を傷れ鬼刺苛三股を深瘡を乾ね馬を乗ぐと稟ま故健宗則件の二
人を留め牝嶋番太と代を隊配都て昨日の如く又彼腰輿を先小早と大掛投下打
せける軍装の目覚えを見て時彦是と評き健宗漫ふ妖神を信仰と云ふ大掛出
陣も凶兆あつらんや約見の狐狸を征る者彼枉津女の狐狸の魅するあ

おの妖怪の約見と憚和漢の先蹤疑ふ況邪りま克も勝負未然不知入を
夕の同話体題這時尙懸寺を義古の軍兵五百餘名と隊分て韓錦樞二
茂洋和甲十郎正義先隊の頭人の奈良櫻八重作次世と副を鶴野奈我四郎鴨
脚短平は是小従の隊の則大江杜四郎成勝峯張六郎通能頭人の勇婦神鈴と
副と見越松時八重是小従の隊の部領の轍魚丸主将を左の防守は四郎季
彦も右の伴日程栄入道趙心あ和甲十郎正忠と後見は魚丸這月打扮の春葱
絨の身甲の精好の奴袴を張せ白羅小五本の練糸と菊の花を縫做した戦袍を
被り金作の大刀の彪の皮の尻鞆掛と鶴丸の佩たり背に駝做さ三羽の征前ふ
握持の重藤の弓連銭青毛の三歳駒の雲珠鞆置て優ふ踏り此紫野深峰の
敏赤總鈴を音鼓たる足撥の御音勇一かをたの者る年二八の美心
年顔の三月の桃花の如く秋山の丹楓不似る正は是幽谷の鳥見春と待り

枝の遷り雪中の寒梅東風吹れて開き欲きも斯やと思可多菊地部領の家花
 號十六番の秋菊も色妙ふ深做したる流の旌旗夏の朝風吹せり器杖執るの
 百の従兵威勢宛虎彪の像く隊伍齊々教方より入る程に鎧の先鋒の頭人牡丹
 五黒九郎也刀齋の二百有餘の隊兵を従へ又彼腰裏に木早多這日の又大
 楓の長暇の邊を端々敵と撞見けり當下健宗の頭人等共馬を騎出りて
 四下响く聲高きふふふと龍の盗見毎昨日微りも又推せり虎の鬚を曳りて
 今目の鏡を覚期せり勇の鎧を拵りて嗚いて萬れ義兵の頭人樞二郎八重作
 ら怒りて憤り下に従徒の廣言天運既の循環く王将の陣と知らるや天四訓思
 知得んぞ三言の果なき三騎相並んで衝き鎧の双尖と受流し相戦ふ樞二郎五黒九郎也
 刀齋やツツの猛者聲早も早苦けくやその隊の在り蛇塚真武四郎鐵持隈八
 郎是を見て先陣尚敗る代りて敵と挫んども共隊兵を找る程に健宗も亦占りて

るごと天女の出願遅く今日も亦折と違ひて冥助と申あり馬の上合意
 きて憶り玉馬を杖に左方従徒の首の毎後陣の頭人北嶋番太右司共後
 下を王の後方の續けり既わく黒九郎也刀齋牡丹五義士頭人樞二郎八重作
 本我四短平也戦ふ程腕衰へ鎧の乱れ各後陣を負取らされ流る鮮血の
 身を際て免れがく見え折る健宗の陣頭の柱居り腰裏の裏より一箇の
 天女閃光の輿の上立願れても小技持る剣と杭て揮晃る程もあはれ留小す
 郎正我も躬方の頭人樞二郎等の敵と戦ふ外小見ら此騎を棄退せり在
 津やぬると張る那時遅く這時速く伴の光景と見て馬の拍打れ馳ぬ
 めて右の合意す硝子の小壺を擲り修煉の精妙窟違を柱津女の肩の撲地と
 打中れ礫の硝子散り砕けて内中の龍の仙丹の那身小塗破ると見え柱津の
 一聲叫び果て身と仰反く伴も時持る剣も離れ背も小怪死で後方

馬を立たり健宗の胸頭も馬と闘ふと鋭味怪む健宗の頭も金く地上に
 存る軀も馬より落れり後人知る今這時杵臼入道趙心靈符を早く合はせ
 の梢の枝も敵の方を推向け如未禪師の法華を唱て真助を祈ける靈符仙丹両
 るも都音の物の應る如狂津の幻術ゆれば彼が持たし劍を健宗首を敷られけ
 意外の奇特の義兵の一軍頭人士卒推並て感嘆の聲を令ける是れ驚く逆
 徒の頭人真武四社丹五黒九郎也刀齋等の戦慄れ敢戦ふ心る引外に逃す
 まも機二郎八重作も逃し遣らば大喝一聲突き鎧の又火の黒九郎社丹五
 或の胸前或の咽喉を刺れて馬より落れり又也刀齋端高奈我四郎短平小前後
 も刺抜れて既の深癩の堪され是れ敢る敷られけ并中限八と真武四郎も金
 も路を横ぎも逃る透る追追鬼來ぬ義兵の頭人勇男女是則別人なる事奉
 張通能と押繪入蓬返せと叫ぶも間近に追逼る限八真武四郎見え敵

男女二人の過た猛しとるも續く兵も結果に徐あゆむ咳け共侶の馬も其方
 へ兼返る程もあらず通能押繪馬を走れ追追鬼も健氣を鐵持蛇塚面を
 豫認る其里も退ると呼ぶ通能九尺の短鎗押繪を八角の棒を以て敷くと杖
 む限八真武四物々々と大刀抜殿看く闘戦も十合に至ら限八も通能も持る
 刃を及落され刺右の肩尖を下高刺れれ勿地糧と落馬しく一重時起も
 破る直武四郎の光景も驚馬怕れて逃すも押繪の透るも八角の棒を以て天窓城
 平張り浩處も時八も後走れ来れれ通能も聲を令ける其奴も縛らるやと
 時八も起んと春蛭く限八を押し寄せをかりけ怒る程も健宗の後陣の頭
 人杜島番太時其思ひも凶変も驚馬は足れてもくも四五箇の近習も共降
 参降参とも喚ぶ敵も近つて来る程も奈我四短平立向も雜兵も皆解せ敷珠

敷系はゆきありけ。介る程の正忠李彦趙心の魚丸と守護あり成勝と三隊と合し。馬と早めてあはける程の通能の時余生拘限を牽せり押繪ハ撲裂る真武四郎の首と合と藤葛の藤と實檢入れをせし世話傳て蛇と殺ま克其首と摧れ。又生て崇まといハ不用意とも押繪の勇悍蛇塚真武四郎と較捕克其天窓と撲裂。あ寔ふ其美小稱のそ人皆大局入りけ。その他韓錦奈良櫻弟兄の較捕。牡丹五黒九郎の首級。奈我四郎と短平の相較ふある也刀齋の首の皆合を共実檢ふ。入れが魚丸其功績の孰も勝れと誉まをら。就中和田正義の軍功と第一番とま。出波不測の妖婦狂津と只一礫打磴した。修煉の和漢の傳稀ハ彼亡骸の有無や索ねて見まると仰まれ正義則兼りと隊兵と得て腰輿の邊と隈と索果て直。中狂津の付きし邊ま口健宗の首の直故る木像の三四箇碎るあり又狂津女の持る劍の長二尺五寸とると思ひふとの劍のありとる。九寸五分の短刀の其頭は

あり。其鞋は拾えりともあり。其共取れ見せまわされ魚丸のゆき。諸頭ハ駭然とまらる者も尚疑ハ鮮さける。開か中小通能ハ正義の向いては。和殿も大抵覚あす。昨日能與の池邊の賤婦の説と思ふ彼荒社在りと。黒圖天の木像のぬまりて鑄野の館在り。大刀自母子と兼り。又亦樅三郎も押繪と共短刀を列々と見ては。這短刀ハ豫知鑄野の什物也。鑄野前と名つけ。傳來ハ箇様を。如此々々のゆき。始ハ已是を知らむ。範的小証られ宛狂の牢較系れ。あ短刀の故る。今狂津の自具と三尺の劍と見えハ亦是狂津の幻術也。其術敗れて登る時短刀ハ彼と離れて怪死で健宗の頭顱と較る落るハ怪死ハ過たれ。久返る大刀自夫婦母子の悪報是ハ至て知る死而已と。小泉皆有理と。嗟嘆をうけ。既ハ健宗の首実檢果ハ正忠則魚丸不棄ま。妖怪對治の功ハ獨止義のま。彼仙丹の奇效ハ在り。其仙丹をまらる。大江峯張の大功ハ正義の

の上のあふし。恩賞の評議の上異日の御制度に依るに依り莫偶合障に似せし異
國の先蹤の奇事記の事あり今正可覚ぬ。洛陽橋の石の偶人夜化て
小兒の戯れと見え天朝昔相摸る。妖地蔵も亦見同くと語を然れ
闇天の木像。其類のくはる。遠く燔燻て妖氣と絶ちあさる。又鑄箭の短刀は既
不吉の物は是も火中の燔燻とて鳥有の倣えの勿論は。それとも尚いそげ。鑄野の
館に推寄せ。大刀自とる。奴們を誅して御本意と遂に。詞意迫く促せ。魚
丸趙心李彦。一議の及ぶ。其議の任せ。黒闇天の改木像。鑄箭の短刀は正我
宜く奉り。他生拘見と健宗以下の首毎の時八奈我の所。程不鑄野の
在る。素のとき。一の隊の隊を如く。隊配を推寄ら。有斯。程不鑄野の
城館。天津天。術敗れて健宗横死の。逃交は。雜兵の告。胸を
知る。大刀自以下留守の頭人鬼薊。計三。竹木。虎狼。有司。不。至。る。も。胸。を。後。ら

怕惑ひて。落度。さ。さ。の。さ。小。單。大。刀。自。の。從。を。猶。龍。城。と。敲。り。若。の。中。軍。を
あ。べ。と。之。撓。む。あ。ら。る。り。計。三。虎。狼。二。有。司。等。三。俱。小。諫。誘。め。れ。も。大。刀。自。此。を
聽。ま。奴。罵。る。め。と。れ。主。僕。忽。地。不。知。ら。る。計。三。虎。狼。二。有。司。等。陽。大。同。意。の。圍
ま。大。刀。自。由。断。さ。せ。て。透。り。窺。ひ。金。銀。を。擡。擧。げ。て。逃。げ。を。示。合。さ。る。程。も。あ。ら。魚
丸。の。大。軍。數。百。名。推。寄。せ。ま。さ。と。さ。り。計。三。虎。狼。二。有。司。等。計。較。違。ひ。て。廿。八。の。り
遺。り。得。大。刀。自。と。刺。殺。し。寄。隊。小。降。參。ま。し。そ。不。忠。の。及。び。研。ら。げ。既。に。義
兵。の。頭。人。和。田。正。義。韓。錦。樅。二。郎。奈。良。櫻。八。重。作。も。先。鋒。の。軍。兵。二。百。名。と。從
へ。真。先。不。找。ま。さ。鑄。野。の。館。と。捕。細。て。攻。潰。ん。と。競。ふ。程。小。忽。地。前。門。の。堀。裏
よ。の。竿。の。頭。小。拈。着。る。と。立。て。三。箇。半。け。り。近。世。兵。家。の。故。實。也。降。參。の。照。据
を。れ。正。義。樅。二。郎。多。士。卒。と。禁。め。敢。動。を。後。陣。か。と。告。げ。魚。丸。諸。頭。人
等。と。共。侶。隊。兵。を。率。て。來。身。程。小。逆。徒。前。門。を。颯。と。開。け。て。士。卒。僅。小。二。千。名。左

右三側小籠居て。則寄隊を迎ける。然れども正義權二郎等の備詭の計あり。と
 思ふをりて八重作等と共侶の士卒と將て找入りて内外隈多く涉獵し伏兵を
 あるところ敵兵多く落亡て目今送留者四五十名過りけり。然程魚丸左
 右の趙心季彦を従へ。正忠成勝通能押給等と共侶の馬を前門小騎入れと女
 關のち登れ。鎭野の有司迎へて航く書院に請待せ。然れが寄隊の軍兵を推續
 せ。欄入りて四下と放言備せざるも。又時公奈我四郎短平生拘見と牽せ。便書
 院の庭に在り。當下鬼薊苛三竹木虎狼二一箇の書函を携て有司四五名と共
 侶の檣廊よりより來り。と許稟せ。魚丸君上不在と臣等御武徳と怖畏て
 降参す。多く欲さる。單大刀自不の字との。罵り狂多。日され。只得首と賜りて實
 檢の備けり。その勸賞の命と饒さる。と喞言が。願ふ。有司等々當
 郡の戸帳と金銀米粟と録せ。大冊子と相捧け。共侶の稟せ。臣等大刀自不

害する者あり。是れを寸功あらざる。免をが。と思ふ。第一番の要緊なる。簿
 帳と呈圖仕り。ゆが。省免あれ。と弱果て陳さ。魚丸は左右と見え。和田大江
 兩兄意見い。向れて正忠判せ。抑苛三隈八の奸虐多。年來範的の悪を資
 け。不忠の刺を欲せ。範的の不慮の健宗の較。果され。怨とせ。及。室家
 従多。大他を資。其罪既の極り。然れ。天の冥罰。隈八を陣中。生捕。苛
 三の由。復。留守。在り。悔。せ。既。事。の。急。と。見。て。王。の。養。母。大。刀。自。刺。殺
 多。已。の。首。と。續。き。實。の。目。鬼。薊。の。虎。畜。る。虎。狼。二。の。虎。狼。を。恩。と。思。は
 多。を。知。る。五。逆。十。惡。の。罪。人。を。食。ひ。彼。身。を。八。割。し。て。乱。臣。賊。子。を。懲。り。兵。母。其
 奴。等。を。牽。出。し。て。共。に。死。刑。の。刑。に。せ。り。と。烈。し。下。知。小。苛。三。虎。狼。二。取。馬。怕。れ。て。逃。ぎ。し。と
 敬。言。固。の。難。兵。定。鬼。り。て。曳。搦。下。と。結。扭。が。八。重。作。時。八。檢。使。不。立。て。船。で。隈。八。苛
 三。虎。狼。二。對。面。牽。出。し。て。檢。の。隨。不。移。り。首。と。實。檢。入。れ。か。健。宗。大。刀。自。の。首

級より其家頭の頭人牡丹五直武四郎黒九郎也乃齋并の寺三隈八虎狼二の直送
 もる皆申明亭の鼻と看らる又黒闇天の本像と鑄造の短刀の正義既に奉りて其の燔
 棄て灰も留めざる是より先降参の有司等と庭中牽れ番大近習の寺三虎狼二隈
 公刑戮せらるる見ゆも顔色都て藍の如く只果伏て在りける李彦と趙心の共
 佛意の魚丸の上正忠成勝の由現致す克殺を去る和漢仁君の善政を
 正忠成勝の已とる件の有司等と此島番大の各耳を削再て俱に廢也亦微
 下又生捕の道者等二百餘捕せ共進放と捉る況名もる雑兵を皆
 郊外に追退け又大刀自付る女房の各其親里か下遣し信言亦魚丸の趙心法
 師の返却の靈符を齋と阿懸寺に遣しく用庵和尚之實母周晋比江尼の怨敵
 對治のよと告知らる次の日倉廩と廂をて窮民を賑し士卒小物と賜ふ各差の
 且且異兵糧軍要金戎衣器械を調進する良農巨商を召せて一倍の賞禄

ありて皆千歳と唱けり介後又魚丸の防守李彦と韓錦樅二郎と使とく
 越後身長尾景春の怨敵對治のよと告げ然景春其大功の速をも感心あり
 て異日京都將軍の御上て為之恩賞と乞稟まより隨即魚丸と部領の郡司補
 任と本領安堵の御教書と下されけり是より魚丸の改め部領郡領武魚と
 稱せられ然れ今春の歡い口自足のよあり扇谷朝興も先非と悔て和睦し武魚
 と好と結ぶ及びて武魚の舊領より莊園十餘ヶ所と返されりあ甘羅の外と隣
 郡及信濃に在り昔年武茂滅亡の時逆臣軋射媚て朝興の厚贈りより扇谷
 の所領より其隨返却せられりあ孝感の致所武魚の徴せり富一倍と領
 まれ阿懸寺の坊料と加増し親同胞并菊池武俊夫妻の為追善の佛事
 年毎に間断あり能與村の荒社を葺更て且昔歳大刀自不奪承られり辨才天
 の本像を池より撈せせて故の如く是と祭り介後能與院と再興し堂舎落成



うを丸

あき

三石堂言巻三

十六

大徳寺



世の中
松の月
うけのま
喜秋
作者自題

あき

あき

三石堂言巻三

大徳寺

の時寺にも亦甚か因て其法燈と續せり。然れは和田正忠と家臣とて本子彦超心と
 老黨とを韓錦樞二郎茂洋智小十郎正義兵頭と奈良櫻八重作次世と山田
 頭ととの他見越松時八鶴脛奈我四郎鴨脚短平受所の俸禄少くは知亦郡
 領武魚の純孝を實母周晋比丘尼の爲に閑居の室と造出て老実の女房と女童我
 名秋隼在らる朝夕安否と問はる。米地隈多治りぬ武魚則李彦の女兒按
 多内室とを按多の素より孝女と容止の醜く且其父李彦の孤忠を菊池
 同族の善臣又部領氏の菊池と同姓の好れは正忠善料京と今合番の教はるる
 這折りて成勝通能媒妁と韓錦の某押繪と和田正義の妻せたり。武勇力
 藝一對の夫婦を世に復言はる所人皆是と羨まはる。正忠の父正忠の素より
 中納言を欲せし職と辭と妙義の遠く又村日趙心の衆門に今也は俗務の預るもあ
 る。身の暇と賜て阿野寺に閑居す。武魚一切是と饒る我身尚弱冠も忠

臣賢者の補佐のむら。今戦國の世小亭が在り留のひを放つるもゆきけり。開が
 中の成勝通能の一時遭際の旅客れども義の依る所已に成勝通能の武運を試すの幸
 いなき功あり。告別と去らまきげと武魚按多韓錦同胞李彦超心智全別を
 惜と留る程小亭祿の四年を盡て相改と暮る。天文の世も密下某生重
 説末米之八晴賢の彼夜又人益九郎と翼小亭。乾父吾足齋の伯所の潜入。吾足
 が貯る金子の由を義女弟を晩稲と極權を欲す。其計較廻結を益
 九郎の吾足齋の病を負せける。其門邊に成勝通能の補補を彼身庭
 する。乾井の驟れて晩稲の狂死吾足齋の讒悔の條を九郎阿健小忠三郎の末
 會の顛末と心とる。知ら外視と窺い潛き。松の樹傳ひ堀を棄て逃去る。其
 程の通能不見せられて席鉞の銃鏡と行本けの御舎を奪く。外面の死下りて
 足信の去るものも素も無類の万人を。遠く立去らる。甲夜は

路備（みちのび）の陰（かげ）小隱（せういん）借（か）るの裏（うら）と菅（すげ）草（くさ）と合（あ）わさる思（おも）ひ今（いま）も（も）思（おも）ひ防（ぼう）小（せう）赴（しゆ）ふ
 奶（ちのち）の類（るい）五（ご）兩（りやう）金（かね）中（ちゆう）盤（ばん）纏（ちん）足（あし）足（あし）るもの先（まへ）二（に）池（いけ）郎（らう）赴（しゆ）て宿（しゆく）六（ろく）向（むか）か
 誘（いざな）ふ此（こゝ）の盤（ばん）纏（ちん）ものせんと（と）猛（まう）可（か）計（けい）較（けう）む奸（けん）智（ち）の本（ほん）性（せい）其（その）里（り）路（ろ）と横（よこ）を
 彼（か）郎（らう）投（な）ぐりて（り）畢（ひ）竟（けい）未（み）之（し）公（こう）其（その）詰（じつ）朝（あ）宿（しゆく）六（ろく）を（を）哄（おん）訪（ぼう）ふ後（のち）の（の）話（わ）説（せ）甚（しん）麼（ま）
 を（を）開（ひら）く又（また）卷（まき）と更（また）めて且（かつ）下（くだ）回（まわ）小（せう）解（かい）分（ぶん）ると（と）聴（き）ねが。

新局玉石童子訓卷之二十終



綉像畫工

一陽齋豊國



淨書筆畊

谷金川

作者曰本編五七回以下軍陣殺伐の文多し然るに綉像本甚だ
 甲由の人物混雜と妙の故不重なる有る中少健宗本有
 の伏誅の如く勸懲を爲し申すに可なり其の巻五頁を以て
 文讀より且巻五巻の叙の教訓を増すと今二百頁を以て
 主并と作者の筆盤遠くを看官の得用を以て云戲房の事と
 此を板元の書肆文溪堂小伝を教員とあり路備代書

○家傳神女湯（かでんしんじゆとう）の（の）みち（みち）一（い）包（ぱう）代（だい）百（ひやく）銅（どう）
 ○精製奇應丸（せいせいきおんがん）の（の）みち（みち）一（い）包（ぱう）代（だい）五（ご）十（じゅう）銅（どう）
 ○熊胆黒丸（くまにんくろがん）の（の）みち（みち）一（い）包（ぱう）代（だい）五（ご）分（ぶん）
 ○婦人坐の妙茶（ふにんざのめうちや）の（の）みち（みち）一（い）包（ぱう）代（だい）五（ご）分（ぶん）
 制茶本家 四谷隠士 龍澤氏
 弘明元飯田町中坂下南側中程 九八沢氏

新局玉石童子訓第七版

第六十一回より 五卷

推續の 近日用板

代稿作者

澤清右衛門

弘化四年丁未秋月刊彫成

五年戊申春正月吉日發行

大坂書肆

河内屋茂兵衛

心齋橋筋博労町

大傳馬町貳丁目

江戸書肆

丁子屋平兵衛板

攻文書肆

下千重平共發

大政書報

四時盛況共發

正羊月甲春五日吉日發行

延外四年十未殊日既須效

外語新書

新書古語門

博風正可資平信策士效業十二回も

繡像復讐山石見英雄錄

全部 五十冊

南海 玉藻主人 編輯

浪花 一葉斎 歌川芳梅 画

○初編 糸師人作 ○二編 玉藻主人詞著 ○三編 泉陽子詞著 ○第四輯 以下作者一家

永録天正の頃筑前名嶋の勇士岩見重太郎橋本李が生さちより武者修好

廿一冊の武功大蛇の害を涂き老狸の妖を修り勇威を振れ後子天の橋立あり

廣成成洲大川市三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し後不室町殿に奉仕して任官

一珍水玉水正は後世に傳へるを同じ言はせ奉り豪が良那藩婦岩瀑孝女新月水子

録一黨の五雄と稱する勇士の列傳靈猿愚魚の怪談も五輯あり八益入佳境新話あり

南久寶寺町心齋橋心入

浪花書肆

伊丹屋善兵衛板

